ハンス・ウルブリヒト
㈲ベルリン芸術家フェアミットルング

— ウルブリヒトさん、あなたは、前に芸術家協会で働いていました。かつての同僚たちと同じように、あなたも独立して自分のエージェントを作られたのですね。芸術家協会は、DDRのとき音楽界、演劇界の全領域をカバーしていましたが、今日では沢山のエージェントがあります。

最近、信じられないほど沢山出てきました。

— 皆、特定の専門を持っているんですか？

国際的なトレンドに応じた、必要に迫られての専門化です。どのエージェントも専門分野がある。その際、アンサンブル、オーケストラ、ソリストの間で区別するのではなく、むしろ真面目な音楽が、娯楽の分野か芝居かということで私は区別していますが、永年、経験と接触を続けてきて、識別できる分野を主張することは大切です。つまり、私はこれを堂々と提供できるが、他のことは他人に任せましょうと。かつての芸術家協会の同僚たちは、これまでの知識を基盤に、この過渡期に自分たちの会社を設立し、極めて厳しい条件のもとで諸問題を解決しなければなりません。お金のないパートナー、少ないスポンサー（ドイツでは平均的に、催しものの5％しかスポンサーによって実現されない）、自分の存在のために戦い、長期プランとは全く別の心配を持つオーケストラと劇場……でも内容的にも、専門的にも新しいエージェントは、かつての芸術家協会（現在は、ケルンのエージェントと合併した）に残った同僚たちのものと少なくとも同じくらい良いものです。

— ロックミュージックの事業はうまく行ってるという感じがします。いわゆる「真面目な」音楽の領域ではどのような状況ですか？例えば、シャウシュピールハウスには大きな問題があるそうですが。

状況は極めて複雑です。これまでシーズン毎に約四百から四百五十の独自のコンサートを催してきたシャウシュピールハウスでは、来シーズンを見ると、もう独自のコンサートはありません。結局、この劇場は貸しホールとなったということです。すなわちコンセプトの枠内で（最も広い意味でクラシック音楽）、ある特定の期間このホールを借りて全てに責任を持つ主催者が、そこでコンサート行うことができる。コンサートホールとしてのシャウシュピールハウスは、商業的に貸し出され、全てのリスクを担うのはエージェントであり主催者です。残念ながら我々新しいエージェントには、まだそれほど多くの資本はありませんが。でも我々にも、よいコンタクトがあり、将来的には自分たちで主催者になるつもりです。

— かつてのDDRの領域には、コンサートに理想的な、魅力あふれるお城や、音楽史的に有名な場所が沢山ありますよね。バッハハウス、ヘンデルハウス、サンスーシー宮殿、フリードリッヒスフェルデ城、ノイハルデンベルク城、ラインスベルクなど思いつきますが……。

それらは皆、収容人数からみてそんなに大きくなく、経済的な支援を必要とするコンサート会場です。室内楽の夕べ「音楽のひととき」というアイデアは、DDR当時芸術家協会の中で生まれて、国家の補助を受けました。個々の楽器のソロのコンサートから、室内楽まで及んでいました。五十席しかないお城では、補助金を通してしかやっていけません。でもそれは、素晴らしい、親密なコンサートシリーズでそのためのよい芸術家も揃えていました。今日、確認しなければならないことは、このコンサートシリーズが崩壊したということです。なぜならば主催者は補助金をもうもらえませんし、興行的にこういうことが利益になることはないのですから。

— そして地方自治体にもお金がない……

そうです。構造は、西側で数十年来なされてきたように安定していないんです。こちらの地方自治体では、文化への補助金がいくら位もらえるかも、よくわかっていません。補助金が入っても、コンサートに投入されるよりも、もっと窮迫したところに支払われるでしょう。そして失業者の問題が、もちろん大きな役割を演じています。人々は、コンサートに行くよりも、もっと別の心配がありますからね。芸術家たちは、観客の数が減ったことに繰返し驚かされてきました。これが、目下危機全体の中で一つの問題です。我々は、この危機を克服し文化生活をきちんと維持するために、我々のささやかな領土のなかで、あらゆることをしなければなりません。いかにお金をかけずにコンサートを挙行し、このコンサートを将来への一つの投資として理解できる芸術家たちを見出すか、新しいアイデアを発展させてきました。この谷底を通り抜ければ、いつかドイツのこちら側でも再び浮上することが出来るでしょう。喜ばしいことに、関係者たちの歩み寄り、努力の積み重ねが常に見られるので、将来的には楽観しているところです。今、重要なのは、旧西ドイツや国際的にも我々のコンタクトを拡大していくことです。

日本の有名なソリストたち数名の興行のお世話もすで

にしてきました。一人の芸術家は最近皇族の前で演奏したそうで、デュッセルドルフのロベルト・シューマン記念祭に出場しています。少しずつこの日本との関係を強化していきたいと思っています。日本でよきパートナーを探して、適切な状況に合わせてドイツの芸術家を日本に送り、また逆に日本の芸術家にもこちらで演奏する機会を与えて、交流を促進できればいいですね。

— ドイツ側では、主として若い芸術家を打ち出していくのですか？

ええ、そうです。学生時代に奨学金を出し、演奏の機会を与え、国際コンクールへの道を切り開いた人たちが、成功しました。例えば、ライプツィヒ放送交響楽団第一コンサートマスター、ヴァルトラウト・ヴェヒター、スイスにも留学したヴァイオリニスト、ジルビア・フィアテル、優秀なパガニーニ奏者、コンラート・ムックなど……長いリストを上げることができますよ。

— この才能のある若い芸術家たちが、まもなく日本でも演奏できることを望んでいます。ありがとうございました。

（一九九一年七月二十五日）

シュトゥルマー＝アレックス・エリカ

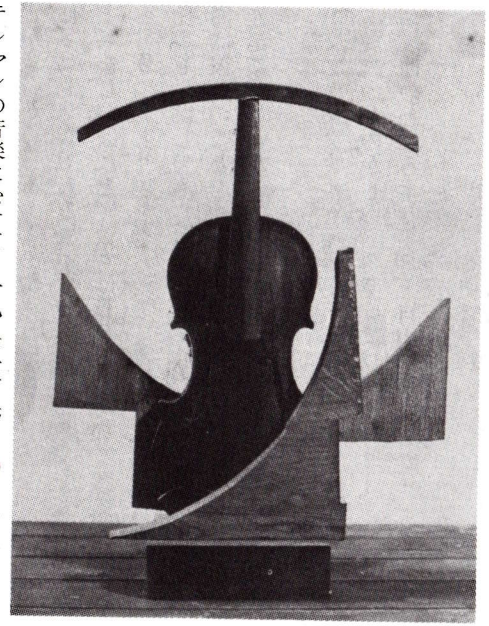
画家・彫刻家・版画家

シュトゥルマー＝アレックス・エリカは、画家、彫刻家、版画家として、さまざまな素材を使って芸術活動を営んでいます。私は、エリカとは学生時代に知りあいました。彼女が、日本の古典音楽と演劇に関心を持っていたからです。以来、私は友人としての彼女から造形美術に関する多くのことを学んできました。エリカが、フランクフルト／オーデルから約二十キロメートル離れたところに古くからの広い牧羊場を買ったのは、すでに一九八二年のことです。田舎に引っ越し、マルク・ブランデンブルクの静けさのなかで、芸術的理念を表現することになりました。創作は、多方面にわたっています。壁画、板画、版画、コラージュ、素材彫刻、彩色プラスティック彫刻、そして建築とも関連しています。国内外の展示会のリストを見れば、数ページに及ぶことでしょう。エリカは一九三八年ブリーツェンで生まれ、一九五八年から一九六三年までベルリン・ヴァイセンゼーの芸術大学に学びました。

（ベアーテ・ウェーバー）

— 最近はどんな仕事をてがけたの？

西ベルリンの芸術センターで、「真中から外へ」というマルチ・メディア展示会があってね。「家父長制の構造とフェミニズム」というテーマで、東西ドイツとオーストラリアの女性芸術家が作品を展示したの。私の彫刻は、おかしな偶然から出来たのよ。或る日、寂しげな森を歩いていたら、閉鎖された空の兵舎に行き当たった。そこには誰もいなくて、地べたに投げ捨てられた軍服、鉄のヘルメット、マルクス・レーニン主義の教科書が山のように散らばっていた。私はトラバントに積めるだけ、持って帰って、軍服を石膏で固め、展示会では、それを石板として天井からつるしたわ。軍服は、私にとって家父長制の構造の象徴ともいうべきものなの。



テレマンの音楽にむけて　一九八五年（57×19×46㎝）木製

— 変革以来、あなたにとって何が変わったのかしら？

今は、自分が見たいと思う芸術を見られ、聞きたい音楽が聞けて、映画も見られる。友達を皆訪ねることができるし、前に壁があった場所を通るたびに、「ああ壁がなくなって、本当によかった」と思い、喜びに浸るわね。昔からの友達との友情は変わらないし、嬉しいことに、沢山の西の新しい人たちと知り合いになった。彼らの抱えている問題だって、私たちの問題とたいして変わらないのよ。

— でも多くの芸術家たちは、突然の物質的不安定を嘆いているわね。

このような職業を決断したのならば、定収入がないことは、最初からわかっていることよ。それを私は若いときに学ばなければならなかった。大学卒業後二年は何の仕事もなくて、借金で生活しなければならなくてね。私はいつも出来るかぎり、母にも国にも依存しないように